

夕張・芦別の自然

— 富良野芦別道立自然公園 —



1993

北海道自然保護協会

夕張・芦別の自然

— 富良野芦別道立自然公園 —



北海道自然保護協会

表紙 夕張岳より芦別岳（7月）
扉 春近い芦別岳（3月）
紹介 ユウバリコザクラ



富良野芦別道立自然公園

富良野芦別道立自然公園は空知と上川の両支庁にまたがり、面積は357.4平方キロメートルあり、1955年（昭和30年）に指定されております。

夕張岳、屏風山、鉢盛山、芦別岳、岨岳、富良野西岳などの夕張山系を中心として、空知川溪谷、東京大学の北海道演習林の一部、さらに、人造湖ではありますが、桂沢湖、シューパロ湖、野花南湖なども含めた山岳自然公園になっています。

芦別岳はこの地域の最高峰で、深い谷が刻まれたこの岩山は、多くの登山家を魅了してやみません。夕張岳は花の名山としてよく知られており、フタマタタンポポ、ユウパニコザクラ、シソバキスマレなど特殊な高山植物も多く、花の季節には山が飾られるのです。

北の峰は良質の雪のスキー場として、野花南湖、桂沢湖、シューパロ湖などは、身近なレクリエーションの場として親しまれております。さらに、東京大学の演習林の一部は、数多い樹木の見本林として一般に公開され、優れた存在となっています。

この案内書はこれらのエッセンスを紹介したのですが、これを糸口にして富良野芦別道立自然公園を理解して頂きたいとねがっております。

推薦のことば

北国らしい雄大な山岳とそこに広がる原生林、広々とした湿原や湖沼、そして野生生物が生き生きと暮らす豊かな北の大地。

北海道には、この素晴らしい自然環境を適切に保全するとともに、多くの皆さんがすぐれた自然に親しみ、触れ合う場として、6つの国立公園、5つの国定公園、12の道立自然公園があり、その広さは道全体の面積の約11パーセントを占めています。

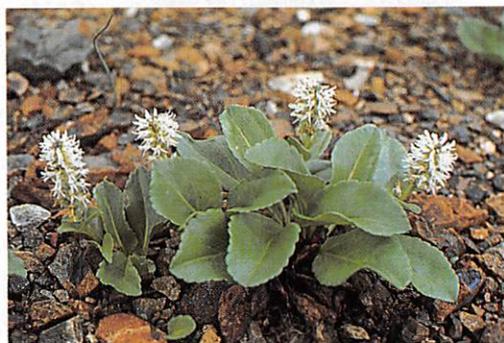
「富良野・芦別の自然」は、こうした自然公園のうち夕張・芦別山系を中心とした「富良野芦別道立自然公園」のガイドブックとしてまとめられたものです。

この地域には、見事なお花畑や日本を代表する特有の高山植物が分布し、ナキウサギやシマフクロウなどの貴重な野生生物も数多く生息しています。また、山麓には野花南湖や桂沢湖、シューパロ湖が原生林のなかで静かに水をたたえ、その素晴らしい景観と豊かな自然は、多くの道民の憩いの場として親しまれています。この地を訪れる方も年々増えており、最近では300万人を越える方々が登山やスキー、キャンプ、ハイキングなどを通して、思い思いに自然を楽しんでいらっしゃいます。

自然は、人間に計り知れない恵みを与えてくれるかけがえのない財産です。そして、こうした自然を大切に守り育て、自然と人間がお互いに良い関係を保ちながら暮らしていける社会を築いていくことが、私たち一人ひとりに求められています。

このガイドブックが多くの皆さんに愛読され、北海道の自然環境への理解をより一層深める契機になりますよう、心から願っています。

北海道知事 横路 孝弘



ユウバリソウ



憩沢のシナノキンバイ

魅力いっぱいの自然

“公園”という言葉には、人の心をときめかす、ふしぎな魅力があります。何かいいことが待っているような、すばらしい出会いがありそうな……。きれいな花々や、かわいい小動物たち。日ごろの屈託から解放されて、のんびりと散策を楽しむ。たぶん、公園はそんな夢を叶えてくれるでしょう。

おなじ公園でも、人工的な性格のつよい都市公園とちがって、自然公園となると、文字どおり自然が主役になります。昭和30年代以降、自然公園の体系はしだいに整備され、最近では年間の利用者が10億人をこえるほど、ひろく親しまれてきました。残念ながら、一方では自然環境の破壊や汚染も進行しています。むろん公園を利用する側でも、節度ある利用を心がけたいものですね。

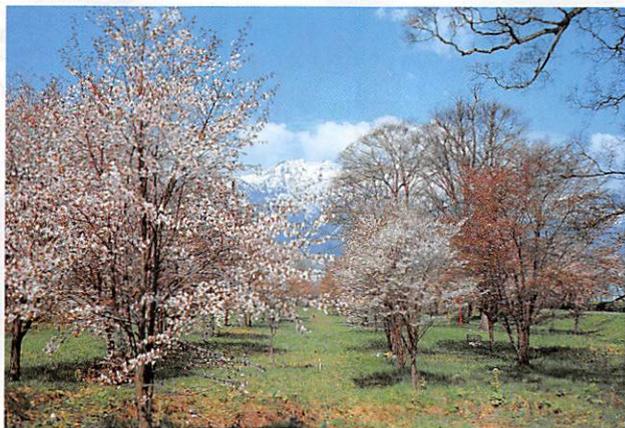
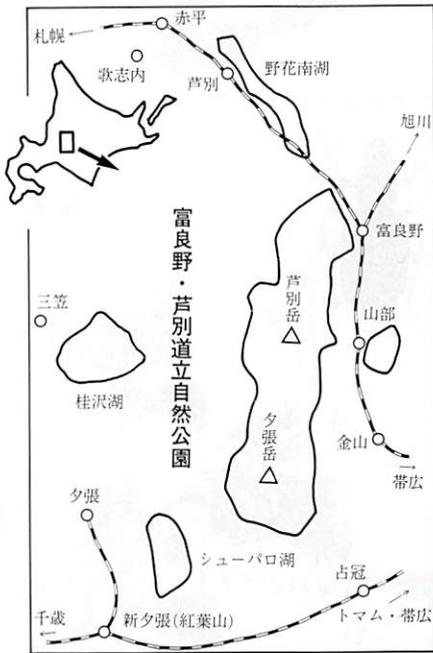
自然公園シリーズ・その1として、今回は富良野芦別道立自然公園をとりあげました。数ある道立自然公園のなかでも、際だって広い山岳公園です。夕張岳の頂きから遥かに芦別岳を望み、さわやかな風を満身に浴びながら、ナキウサギの声を聴いたときの感激を、私は忘れることができません。この小冊子には、地域の生いたちや植生、そこに住む動物たちのことが分かりやすく説かれています。どうか、本書を手引として、魅力いっぱいの自然を楽しんでください。



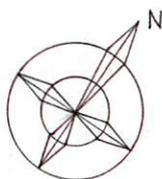
ミヤマハンノキの雄花

目 次

山々の生いたち	7
花をたずねて	16
木と林と森	29
動物たちとの出会い	37
虫たちの世界	48
山と自然とやさしくつき合おう	56



東大演習林のさくら並木と芦別岳



クロヒゲアオゴミムシ



幾春別岳

夕張市



ユウバリソウ



清水沢



夕張の石炭露頭



ユキバヒゴタイ

夕張岳ヒュッテ



夕張川

白金川

夕張岳



シラネアオイ

シューパロ湖



ホシガラス



ゴゼン
タチバナ



ミソバキスミレ

ユウバリコザクラ



エゾナキウサギ

占冠



峠 山

富良野西岳

富良野市

エゾツガザクラ

空
知
川



キビタキ

芦別岳

エゾアジサイ

ツクモグサ

東大北海道演習林

山 部

サクラの林

コエゾイタチ

外国樹種
見本林

十梨別川



エゾシカ

金 山

金 山 湖

ノ ゴ マ

エゾシマリス



ダイセツタカネフキバツタ





芦別市

別川

野花南湖

エゾモモンガ

エゾライチョウ

湖

♀オシドリ

空知川

エゾタヌキ

♂

尻岸馬内川

富良野川

富良野西岳

富良野市

アイヌキンオサムシ

トラツグミ

山部

イブキジャコウソウ

アカハラ



春近き夕張岳



竜仙峡 千鳥ヶ滝



① アルペンの威容を誇る芦別岳（梅沢 俊氏撮影）

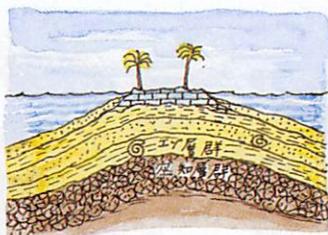
山々の生いたち

中川 充、八木 健三

標高1727mの芦別岳を最高峰とし夕張岳（1668m）へと連なるのが夕張山脈です。この山脈は大雪山などのような火山ではなく、地球の表面を皮のように覆う地殻の大規模な運動によって盛り上がった構造山地で、日高山脈と共に北海道の背骨を造っています。とはいえ、花の名山として親しまれているたおやかな夕張岳と、ロッククライミングの対象ともなる急峻な芦別岳とでは、余りにも表情が違いますね。また、芦別岳の北西に標高こそ低いものの、恐竜の背中のような岬（キリギシ）山（1057m）があります。この岬山も夕張岳と共に高山植物で有名ですが、その種類はだいぶ違います。これらの地形や植生の違いは、山がどんな岩石からできているかによって大きく変わってくるのです。ここでは、こうした山々の特徴を作り出す地形と地質について観察してみましょう。



I



II

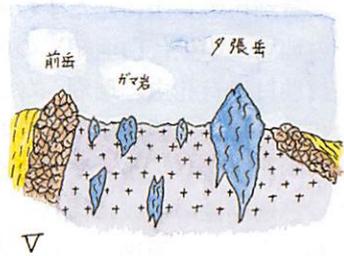
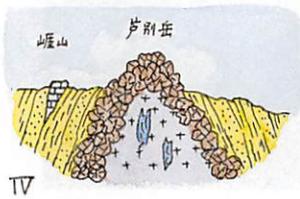
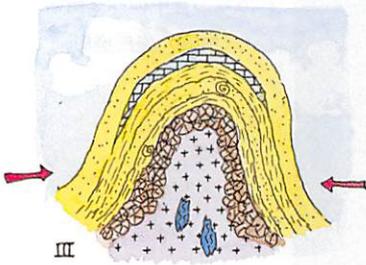
[芦別岳]

富良野盆地、とりわけ山部から見上げた芦別岳は険しい急崖と切り立つ稜線が印象的で、北海道には数少ないアルプス的景観の山です①。この急峻な地形の部分は枕状溶岩（空知層群下部層）と呼ばれる岩石からできています。先に夕張山脈は火山ではないと書きましたが、実はこの岩石は今から1億数千万年前の中生代に深い海底で噴火した火山の溶岩（海洋地殻の一部）なのです(I)。

海中で流れだした高温の溶岩は柔らかなチューブ状になって広がって行き、それが幾つも重なりあった結果、丸い枕や俵を積み重ねたような岩石ができます。これが枕状溶岩です②。岩の角度によってときには鱗が幾重にも重なった様にも見えます。この岩石はもともと鉄やマグネシウムに富んだ玄武岩質の黒っぽい石ですが、変質して緑泥石ができるため深緑色になっており緑色岩とも呼ばれています。この溶岩の上に堆積した砂や泥が固まり、堆積岩層（アンモナイト化石で有名な蝦夷層群）ができ、枕状溶岩とともに地殻を作ります(II)。

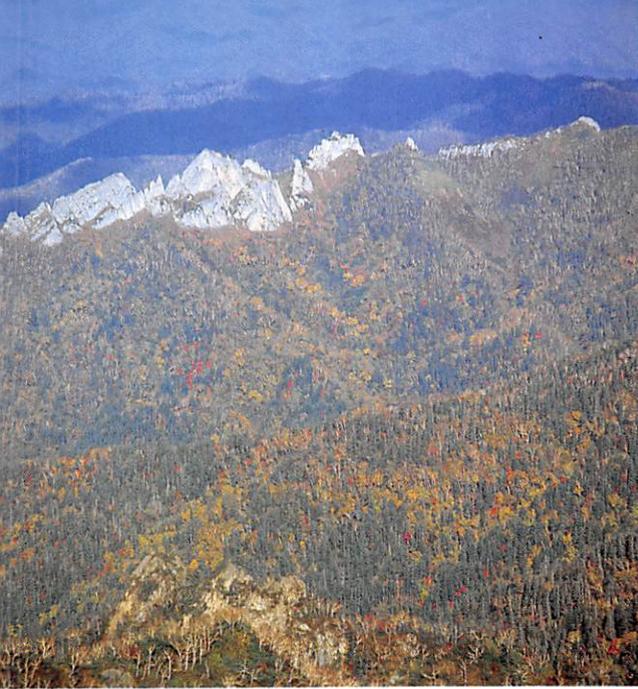


② 枕状溶岩の産状 芦別川上流部



それでは、どうして海底の岩石が立派な山脈となったのでしょうか。簡単にいえば地球規模の運動によって地殻が左右から押され、上向きにたわんで（褶曲）一筋のシワのように上昇したのです。ですから、枕状溶岩の上に溜ったより新しい時代の堆積岩が夕張山脈の東西両側にあるのです。こうした構造を背斜構造と呼びます(Ⅲ)。

背斜構造の芯（軸）に当たる枕状溶岩は両側の蝦夷層群より堅いので、長い間の雨や雪や風による風化・侵食作用に耐えて残り（差別侵食）、ついには山脈となりました(Ⅳ)。枕状溶岩が険しい地形を作るのは、山だけではありません。ユーフレ谷はもちろんですが、空知川や沙流川など多くの川でも峡谷を作っています。



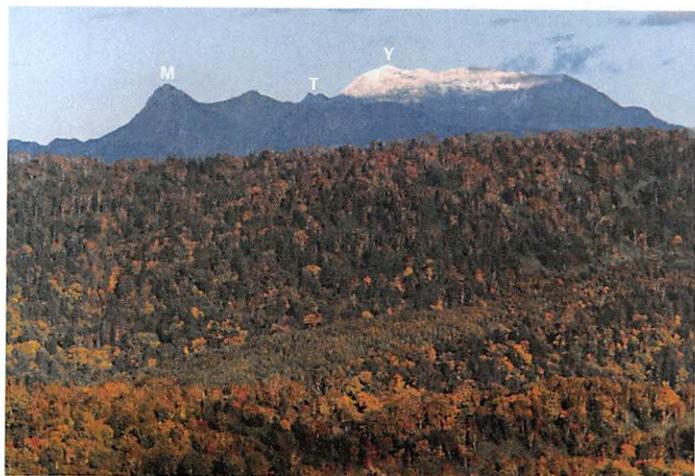
③ 恐竜の背中の様な嵯山
(梅沢 俊氏撮影)

[嵯 山]

芦別岳の北西にたたずむ嵯山は、蝦夷層群と呼ばれる砂岩や頁岩の地層（中生代白亜紀）の中に挟まれた石灰岩層です。この石灰岩は巻貝、有孔虫、珊瑚、などの生物の遺骸が集まって出来た石で、ルーペで良く観察するとこれらの化石が見られます。夕張山脈が海の中から盛り上がってくる途中で海底山脈になり、その稜線部がちょうど珊瑚礁の形成に都合のいい浅くて暖かい海的环境となったのでしょう。その珊瑚礁からできたのが石灰岩です(II)。その後更に上昇して夕張山脈を軸とした背斜構造を作りました。嵯山はその西翼部になるため、地層が立っているのです。

石灰岩は長い年月の間には、水に溶け出して鍾乳洞などを作ります。それにしても、周囲の蝦夷層群の砂岩や頁岩よりは侵食に強いので、石灰岩層だけが恐竜の背のように連なる独特の景観を作りだしたわけです③。これも差別侵食の一つです(IV)。

この石の主成分は炭酸カルシウムです。カルシウム以外の成分が殆ど無いので、この石が風化してできた土壤もカルシウムに富む特殊な土壤となります。そこで、特異な高山植物がひそやかに育つのでしょう。



④ 西側から眺めた夕張岳

左の尖峰が前岳（M）、奥に雪を頂いた夕張岳本峰（Y）、間に釣鐘岩（T）を見ることができる。（夕張丁未公園より、10月）

〔夕張岳〕

夕張岳では、更に見事な地形と地質の関係をることができます。西側から見る夕張岳は、手前に前岳（1501m）の尖峰があり、その奥に夕張岳本峰が肩を張ったようにどっしりとそびえています④。この前岳は芦別岳と同じ枕状溶岩なので、急な地形を作ります。夕張側の登山道は前岳の中腹の北側を巻いてお花畑に出ます。途中岩肌が出ている所（露頭）で丸い溶岩の尻尾が見られることでしょう⑤。

前岳から夕張岳にかけてはなだらかで高山植物の宝庫、正に夕張岳の真骨頂です。これらは、夕張岳を中心に広がる蛇紋岩メランジュという特異な地質現象によって育まれてきました。蛇紋岩メランジュとは、蛇紋岩中に様々な種類や大きさ・形の岩塊（岩石ブロック）



⑤ 枕状溶岩の産状
前岳直下の登山道にて

が点在するものをいいます。柔らかい蛇紋岩は侵食作用によってなだらかな平原を作ります。Gamma岩や釣鐘岩、そして夕張岳本峰をつくる岩塊は結晶片岩とよぶ硬い岩石なのでそれほど侵食されず、平原上にとび出して残ります。こう



⑥ 典型的なノッカー地形の前岳—夕張岳本峰間
 右上に前岳 (G)、中央にガマ岩 (G)、手前が蛇紋岩崩壊地、
 矢印は点在する岩塊を示す。

して、あたかも蛇紋岩の海に浮かぶ岩塊の島々といった風情の地形景観（ノッカー地形）を生み出しているのです⑥(V)。勿論これも差別侵食作用の結果です。

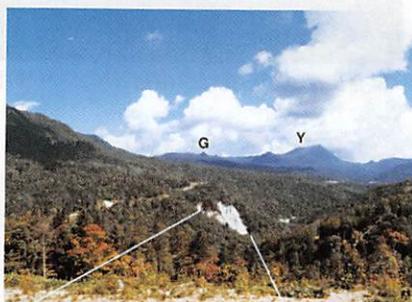
蛇紋岩はもとは地殻の下のマントルを構成していた固いカンラン岩でした。それが、壮大な地球の運動によってカンラン岩に水が加わると、主に蛇紋石の集合した蛇紋岩に変わります。蛇紋岩は柔らかくて軽いので、マントルから地殻の方に上昇しました。この際にその通り道にあった地下深部の岩塊（結晶片岩や枕状溶岩が多い）を取り込んで一緒に持ち上げてきました。そして、芦別岳の項で説明した山脈を作る褶曲運動とも相まって、背斜構造の軸部を蛇紋岩が突き破り、地表に顔を出したのです。偶然にも前岳の硬い枕状溶岩層が西側の城壁になり、東側を巨大な夕張岳山頂ブロックに挟ま



1 : 前岳、2 : 滝ノ沢岳、3 : ガマ岩、4 : 釣鐘岩、5 : 夕張岳、6 : 芦別岳

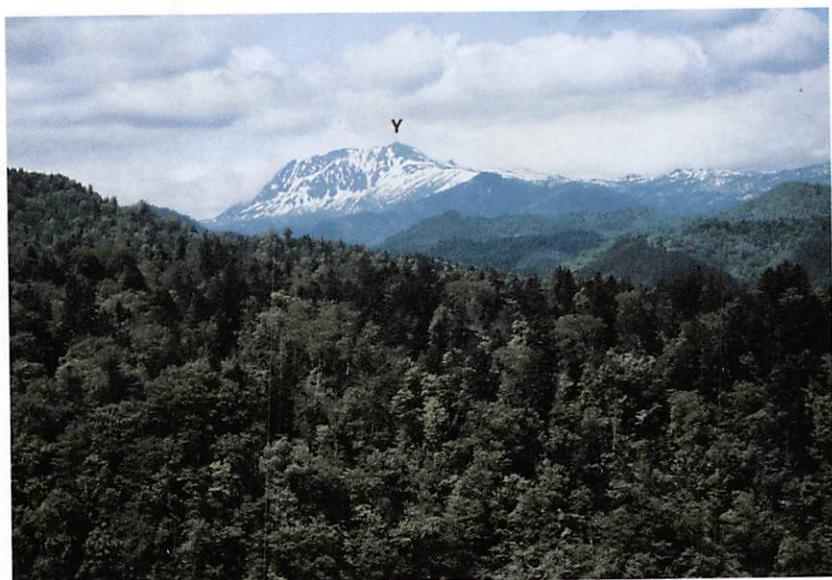
れたおかげで、崩壊し易い蛇紋岩⑦を過度の侵食から守り、メランジュが標高の高い所に広く保たれるようになったのです。なお、この蛇紋岩の上には樽前火山の白い軽石層が覆っているのが見られます。

蛇紋岩は枕状溶岩より更にマグネシウムや鉄に富んでいるので超苦鉄質（超塩基性）岩と呼ばれています。マグネシウムは日本語で苦土（くど）というように、植物にとって栄養分の乏しい土壤にしかありません。さらに、山岳地帯の厳しい気候条件も加わって氷河時代からの生き残りである高山植物しか生育できない環境となっているのです。つまり、高山植物を駆逐する強力な外来種の侵入から守っているのは、長い間かかって作られてきた外ならぬ大地の生い立ちの絶妙さだったのです。



⑦ 蛇紋岩崩壊地
白金川中流

蛇紋岩は柔らかく弱いため、大規模な崩壊が起こりやすい。



⑧ 金山ダムから見た夕張岳（Y）（6月）

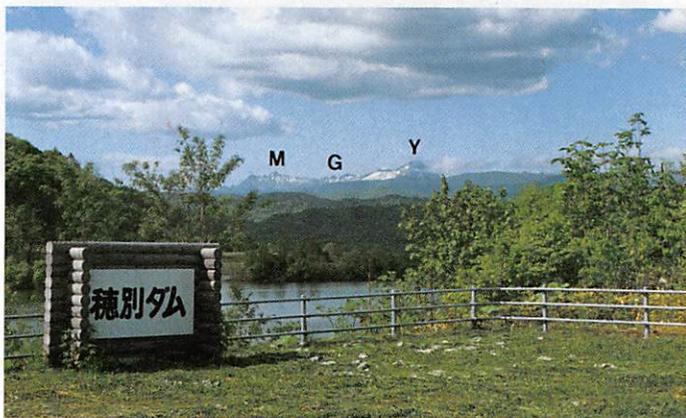


⑨ 桂沢湖展望台より見た夕張岳（Y）と前岳（M）（4月）

[シューパロ湖]

夕張岳や芦別岳を源として西へ流れる夕張川、初めて出会う湖がシューパロ湖です。これは、大夕張ダムによって作られた人造湖です。ダムは自然と人間の営みの関係の縮図とも言えます。このダムは1962年に作られました。シューパロ湖沿いの道路からは、対岸に当時の森林鉄道の鉄橋が見え、道路脇にはかつて夕張が炭鉱で栄えた頃に、石炭を運んでいた鉄道の跡地がサイクリングロードとなっています。シューパロ湖の展望台から夕張岳は見えませんが、少し大夕張へ進んだ地点からは今も変わらぬ堂々たる姿を望むことができます。

夕張岳を巡る各所にこうしたダムが作られ、人工湖ができました。面白いことに、これらからの眺めによって夕張岳の東西南北何れの姿も見ることができます。東側は金山ダムの上から⑧、北側は桂沢湖展望台から⑨、南側は穂別ダム上流にある展望台から⑩、ドライブやハイキングの時に山の姿を観察して、長い地球の営みによって絶妙に造形られた夕張岳の生い立ち、その地形・地質についても思いを馳せていただきたいのです。



⑩ 穂別ダム展望台より眺める夕張岳（Y）（6月）
前岳（M）やガマ岩（G）の突起も認められる。

花をたずねて

梅 沢 俊



湿性のお花畑

夕張山地には二つの大きな山が聳えています。一つは南にある夕張岳で、大雪山を小さくしたようななだらかな姿を見せています。北にある主峰の芦別岳は、北海道では数少ない天を突くような岩山で、岩稜や岩壁がロック・クライミングの場となっています。

この対照的な二山は全国的に貴重な高山植物の育成地なのです。どんな植物が見られるのか観察しながら登ってみましょう。



前 岳

■夕張岳

夕張岳は花の名山として全国に知られています。この山に大規模なスキー場ができそうになり、猛烈な反対運動が起きてますます有名になってしまいました。今では花シーズンの週末には登山口から車の列が林道に延々と続く状態です。ぜひこの山の環境を傷つけないような登り方を心掛けてください。

夕張岳は無理すれば札幌から日帰りに登ることができますが、じっくり花を観察するには登山口から20分ほどの夕張岳ヒュッテに一泊したいものです。

ヒュッテから冷水コースに入ります。しばらく傾斜の緩い造林作業道の跡をたどりますが、周囲に植えられたアカエゾマツが背丈をはるかに超え成長しています。傾斜がぐんと強まると登山道らしくなり、辛い登りが続きますが高度はぐんぐん上がります。昔伐採を受けたまばらな林からエゾマツなどの針葉樹が目立ってくると最初の水場、冷水の沢はすぐです。ここまでの道端ではエゾアジサイやエゾノヨツバムグラ、ゴゼンタチバナ、マイヅルソウなどが見られます。



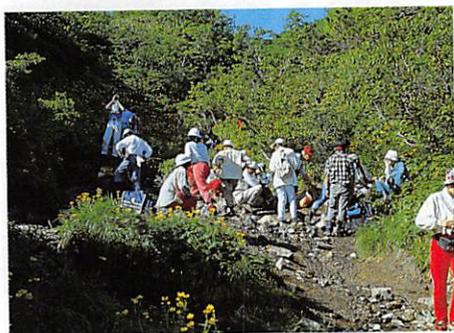
エゾマツ

冷水の沢から花が多くなります。コイチヨウラン、アリドウシラン、ツバメオモト、ヒメゴヨウイチゴ、コバノイチヤクソウ、コミヤマカタバミなどが次々と現れ、ゴゼンタチバナの群生も見事だし、初夏にはムラサキヤシオが一齐に咲きます。

前岳の沢を過ぎ、キソチドリやツルアリドウシを見ながら左手にあった尾根に登り、馬ノ背コースと合流します。左手に滝ノ沢岳を眺めながらの尾根歩きとなりますが、傾斜は次第にきつくなります。樹林はダケカンバ林に代わり、急斜面ではシラネアオイやサンカヨウが目立ち、注意するとエゾクロクモソウがたくさん生えています。



滝の沢岳



憩の沢

急斜面を登り切ると、前岳から崩壊した岩が転がる石原平となり、前岳の山腹を巻くように北へ向います。シラネアオイが多い所で、タイミングが良いと花に囲まれて歩く感じとなります。クロツリバナやハクセンナズナも多く、秋にはウスバトリカブトが咲きます。

やがて芦別岳をはじめ、幾つもの山が眺められる展望台に出ます。夕張岳はまだ見えませんが、足元にはカノコソウやナガバキタアザミが見られます。今度は前岳を右上に見上げるようにして東へ向うと憩沢の水場、そして前岳湿原のお花畑です。シナノキンバイ、エゾミヤマアゲボノソウ、チングルマ、ムシトリスミレなどが出てきます。



エゾミヤマアゲボノソウ



ウスバトリカブト



ユウバリリンドウ



ムシトリスミレ



ユウバリコザクラ



シソバキスミレ



エゾコウボウ

奇岩、ガマ岩の奥に夕張岳を望みながらハイマツとダケカンバの尾根を進み、右手に男岩を見るとガマ岩は眼前となりますが、道端ではチシマザクラやエゾウサギギク、ハクサンチドリ、ユウパリリンドウが咲いています。コースはガマ岩とヒョウタン池の間を抜けて頂上に向かいますが、池にはチシマミクリの葉がたくさん浮いています。

ヒョウタン池を過ぎるといよいよ核心部です。道の右手に蛇紋岩の崩壊地が現れます。一見裸地に見えますが、ユウバリコザクラ、シソバキスミレ、エゾコウボウ、カトウハコベなど貴重な植物が生えている所です。



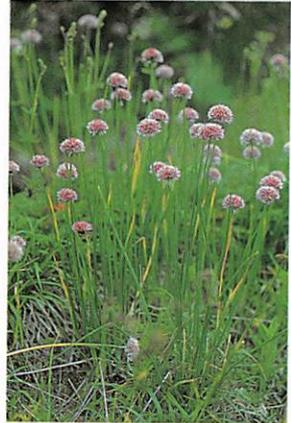
カトウハコベ



崩壊地

蛇紋岩には植物の育成を阻害するマグネシウム・イオンなどが含まれているので、それに耐えることのできる特殊な植物だけが分布するのです。上記の植物のほかホソバトウキ、ホソバツメクサ、タカネタンポポ、シロウマアサツキなども見られます。

見晴らしの良い高原歩きといったならかな道が続き、コースが右に大きくカーブを描くと湿性のお花畑が広がります。シロウマアサツキ、イワイチョウの群落が見事です。



シロウマアサツキ



タカネゲンバイ



タカネタンポポ



ユウバリソウ



ユキバヒゴタイ



ナンブイヌナズナ



エゾミヤマトラノオ

そのほかエゾミヤマアケボノソウ、チシマツガザクラ、エゾシモツケソウ、ヒメシャクナゲ、リシリリンドウ、ユウバリソウなども見られますが、悲しいことに盗掘跡もたくさんあります。

道端にタカネゲンバイが咲くハイマツ帯を抜けて、釣り鐘岩と熊ヶ峯の鞍部めがけてエゾウサギギクやショウジョウバカマが多い急斜面を登ります。登り切ると蛇紋岩が露出した「吹き通し」と頂上が目の前にあります。



砂礫原



吹き通しの近く



ホソバノイワベンケイ

吹き通しはその名の通り風が吹き抜ける鞍部ですが、ユウバリソウ、ユキバヒゴタイ、タカネツメクサ、ユウバリキンバイ、ナンブイヌナズナ、ミヤマアズマギクなど夕張岳らしい花がたくさん見られる所です。

吹き通しの先で左から金山コースが合流してハイマツの急斜面にジグザグを切って頂上を目指します。最後はミヤマオグルマやイワウメを眺めながら頂上を踏みます。



ユウバリカニツリ

頂上！





エゾノクモマグサ



ユウバリシャジン



ミヤマハンモドキ

頂上からは十勝連峰や日高山脈の展望もさることながら、振り返ると望岳台から先のコースが見下ろせ、蛇紋岩崩壊地の分布がよく分かります。帰りは往路を戻ることになりますが、途中から森林が良好な状態で残されている馬の背コースをとることをお勧めします。

なお登山コース沿いでは見られない主な花にはエゾノクモマグサ、タカネエゾムギ、ユウバリツガザクラ、リシリゲンゲ、ユウバリシャジン、チョウノスケソウ、ミヤマハンモドキなどが挙げられます。

■コースタイム（休憩や花見の時間は含まれていません）

夕張岳ヒュッテ（1時間20分）冷水ノ沢（20分）馬ノ背コース分岐（30分）望岳台（30分）憩沢（1時間）吹き通し（20分）夕張岳（1時間10分）望岳台（20分）冷水コース分岐（1時間10分）夕張岳ヒュッテ



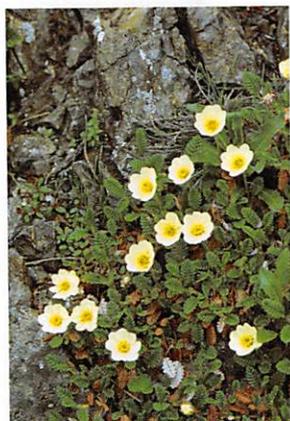
富良野西岳より 芦別岳

■芦別岳

芦別岳は夕張岳とは対照的に尖った岩山です。その岩壁にしがみつくように生える花が魅力となりますが、固有の花は残念ながらありません。登山コースは新旧の二つあり、花見としては旧道がお薦めですが、距離が長く、起伏もあり、健脚者向きといえます。ここでは旧道から新道へ一巡りしてみます。花を見ながら旧道をたどり、新道を一気に下りることにします。麓の山部自然公園から日帰りも可能ですが、山奥のユーフレ小屋に泊まると少しは余裕が出てくるでしょう。

自然公園から林道を詰めること30分で旧道登山口です。林を抜けてユーフレ川左岸に沿った道をたどりますが、途中二箇所で大きな高巻きを強いられます。エゾアジサイやクシロワチガイソウ、ズダヤクシュなどを見ながら1時間余りで夫婦沢が右から滝となって出合います。ユーフレ小屋へは本流に沿って10分、旧道は夫婦沢右岸に沿って登ります。

沢の傾斜が強まり、眼前に迫る柏山の岩壁を過ぎすと夫婦岩への道を左に分け、すぐ沢と別れます。オガラバナやミネカエデの中に湿った道が続きますが、ツバメオモト、シラネアオイ、サンカヨウ、ケエズキスミレなどが慰めとなるでしょう。



チョウノスケソウ



ミヤマオグルミ



チシマアマナ

尾根筋に出ると樹木がまばらになって、トウゲブキ、チシマフウロなどが咲く小規模なお花畑が出現します。左手に迫力ある夫婦岩を見て急斜面を登り切ると、北尾根の上に出、ようやく芦別岳が望まれます。ここから起伏を幾つか越えての尾根歩きとなりますが、尾根は芦別岳に近づくにつれ細く岩稜状となって、可憐な花も目につくようになります。主なものを挙げると、アオノイワベンケイ、アオノツガザクラ、イワツツジ、イワベンケイ、ウスユキトウヒレン、エゾノツガザクラ、エゾノハクサンイチゲ、エゾヒメクワガタ、キバナシャクナゲ、チシマアマナ、チシマゼキショウ、ツクモグサ、フギレキスミレ、ミネズオウ、ミヤマアズマギク、ミヤマオグルマ、ミヤマオダマキ、ミヤマリンドウなどです。



ツクモグサ



フギレキスミレ

頂上に近づくと尾根はエゾノハクサンイチゲやチングルマ、ツガザクラ類の広いお花畑に吸収されてしまいます。そこから小高い頂上へはツクモグサやエゾルリソウを眺めながら登りますが、ツクモグサは盗掘のため姿を消しつつあります。登頂の喜びも、悲しみと憤りで帳消しです。

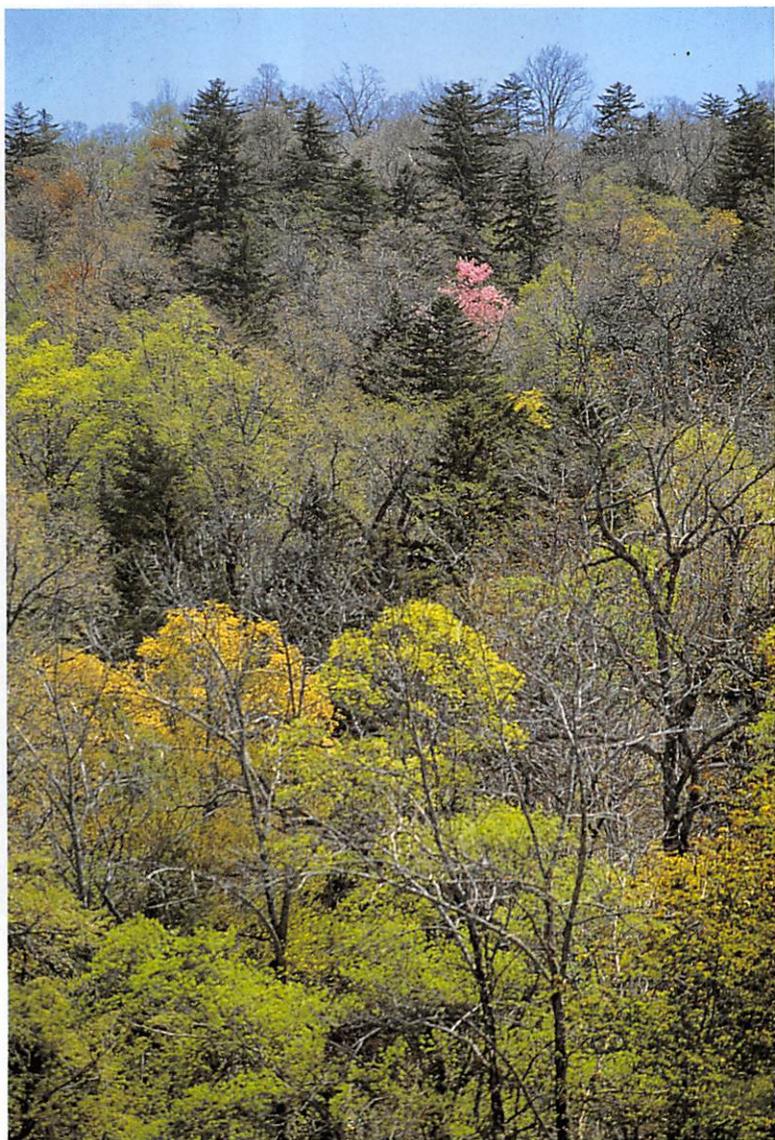
帰路は短い新道を下ります。新たに出会う花はまずないので、どんどん下りましょう。ユーフレ小屋に残した荷物を回収するなら、中間地点の鶯谷から左手の覚太郎コースを下りなければなりません。新道コースをさらに下ると登山口近くでキャンプ場方面への連絡路を左に分けています。



エゾルリソウ

■コースタイム（休憩や花観察の時間は含んでいません）

山部自然公園（30分）旧道登山口（1時間）
ユーフレ小屋分岐（50分）夫婦岩分岐（3時間30分）
芦別岳（20分）雲峰山（20分）半面山（30分）鶯谷（1時間50分）新道登山口



春の針広混交林 東京大学演習林

木と林と森

鮫島惇一郎

シュウパロ川やベンケモユウパロ川、さらにパンケモユウパロ川などを一つに集めた川を夕張川といいます。石炭の街として繁栄をきわめたという言葉は、もう過去のものとなってしまいました。幾つかの炭坑のあいだを抜けて南に向かうこの夕張川は紅葉山を過ぎるあたりでその流れを西に変えます。

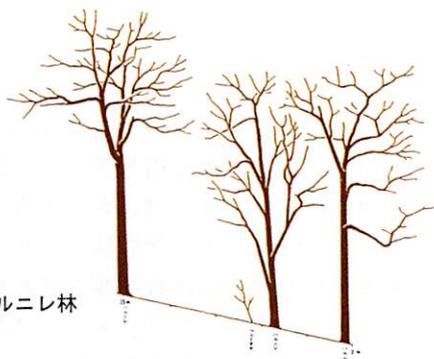
谷を刻み急流となり、あるいは淵として水を湛える夕張川に沿う山肌は、秋の日にあまたの樹々で飾られます。ヤマモミジ、メイゲツカエデ、ナナカマド、ツタウルシ、ヌルデなどの赤や朱の鮮やかさ。シラカンバ、カツラ、イタヤカエデ、ベニイタヤ、シナノキ、オオバボダイジュ、ハリギリなどの目の覚めるような黄、そしてこれらをしっかりと支えてくれているのがトドマツの深い緑なのです。北国の秋は短い。それだけに限りある時間に注がれる樹々の熱い想いが込められているのではないのでしょうか。紅葉山から滝の上にかけての溪谷は、その名に背かず訪れる人の目を楽しませてくれます。

それであるのに、「石勝線」という新線が開業した折りに、「紅葉山」の駅名が消えてしまったのです。惜しまれます。隣にはまだ「楓」という街は残っておりますが。

夕張川流域は、古くから林業がよく行なわれたところです。宝暦年間といえますから、二百年以上も昔のことになりますが、飛騨屋こと武川久兵衛が石狩山（石狩川、豊平川、漁川、夕張川など流域の総称のことです）の伐木を松前藩から請け負ったのがその始まりだといえます。エゾヒノキと称してエゾマツを伐って売ったという記録が残されております。当時の図面には夕張岳が勇張山と書き記されています。

無尽蔵だと思われていた森林資源も、あとから育ってくる量より上回って伐れば、乏しくなってくるのは当然です。時代が下るにつれて森林は少しずつみすぼらしくなってきます。しかしながら、部分的にはまだかつての森林の面影を留めている林に出会うことができます。

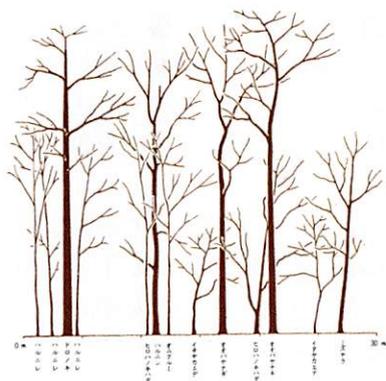
芦別川のハルニレ林



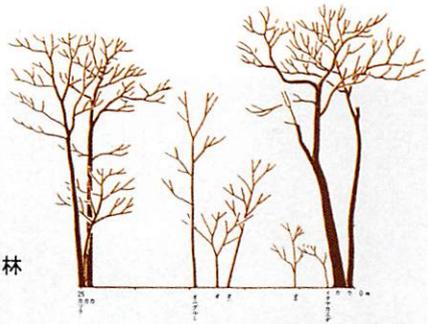
シュウパロ川をはじめ、芦別川やペンケモユウパロ川などが造った河岸段丘にハルニレの整った林を見付けることができます。イタヤカエデやオニグルミ、ヒロハノキハダなどが混生していることもしばしばです。

このような林の中にはいってみると、遠目では単純に見えた下草もたいへんに種類の多いことがあります。図鑑を片手に友達と調べてみるなど、きっといい思い出を造ってくれるにちがいありません。

似たような環境のところに、胸のすくように伸びきった樹々の並ぶ林があります。オオバヤナギの林です。気持ちまでのびのびとなる素敵な林です。大きな木というものは、人の心に安らぎを与えてくれる不思議な存在ですね。十梨別川やシュウパロ川沿いに良い林を見付けることができましょう。



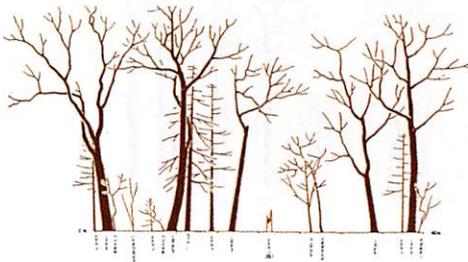
シュウパロ川のオオバヤナギ林



十梨別川のカツラ林

また、カツラ林やヤチダモ林、イタヤカエデ林も捨てがたい魅力のある林です。夕張川や芦別川、さらに十梨別川の流域にはこのような林が、まだ随所に残されているのです。自然公園の区域外ではありますが、紅葉山の下流、千鳥ヶ滝のある竜仙峡から滝の上地区はアサダ林、ヤチダモ林、シウリザクラ林、オオバボダイジュ林、ヤマモミジ林、そしてミズナラ林など、いろいろな冷温帯性落葉広葉樹林をひとまとめに観察できる貴重なところですが、しかしここは高速自動車道路の予定地とか。「そんなに急いで何処にゆく」と林たちの嘆きが聞こえませんか!!

山麓帯で広く見られる広葉樹林はミズナラを主とする林です。ミズナラは樹のなかでも樹らしい枝振りと風格をもっている樹です。まことに自由闊達で、しかも大きな包容力を備えた樹といえます。ミズナラの周りには、トドマツなどをはじめ、おおくの稚樹が良くはえていて、ミズナラが失われると当然のことながらこれらトドマツたちが伸びはじめるといわけです。「ミズナラはトドマツを育てる」というのももっともなことです。



惣芦別川のみズナラ林

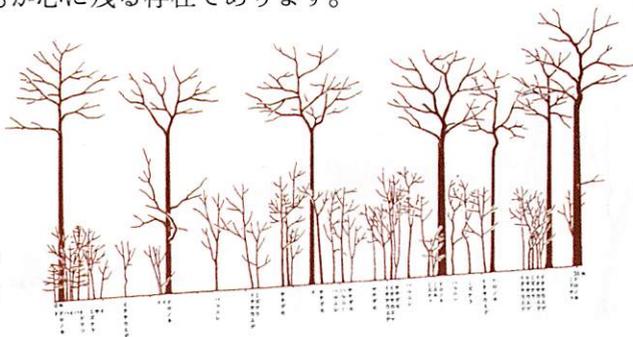


十梨別川の
ドロノキ林

すっかり秋が深まって、モミジやカツラの葉が水に浮かび、回りながら流れに乗る頃、十梨別川を訪れたことがあります。現在、多くの人々は大夕張を起点として、夕張岳に登っておりますが、かつては、根室本線金山駅から十梨別川沿いの道がよく使われたといえます。トナシベツ溪谷といわれるぐらいですから、樹々の紅葉と溪流の組合せは十分に楽しめます。

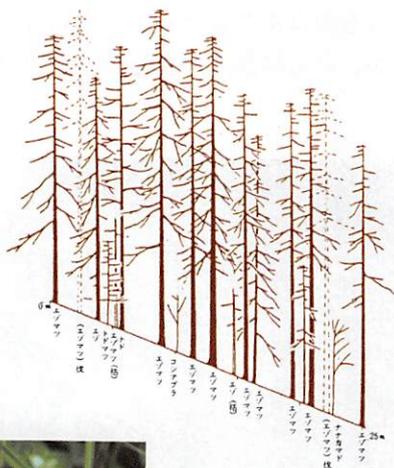
直径が1メートルをこえる樹が並んだドロノキの林、陽を浴びて鮮やかな黄金色に輝いていたカツラの林、さらにエゾマツ、トドマツの濃い緑の林など、静寂というたたずまいのなかであって、そのいずれもが心に残る存在であります。

十梨別川の
ドロノキ林



どこの山でもそうであります、山麓の落葉広葉樹林よりすこし高い所になると、針葉樹の混じり具合はさらに多くなります。北海道を代表するとまでいわれたエゾマツ・トドマツ林もめっきり少なくなってきましたが、身近に接することができる場所では、夕張岳山頂に向かう冷水コース、馬の背コースということになりましょう。全く人の手が入っていないというわけではありませんが、かなり自然な姿の針葉樹林を楽しむことができます。密にエゾマツやトドマツが生育しているところではササは貧相で、オシダやシラネウラボ、ジュウモンジシダなど羊歯（シダ）類が多くみられます。登山道に沿ってゴゼンタチバナの愛らしい姿を見付けはじめるのはこのあたりでしょうか？

パンケシュウバロ川のエゾマツ林



ゴゼンタチバナ

当然のことではありますが、針葉樹がまばらに生育するところでは、ササがよく茂り、中を歩くことが大変に難しくなってきます。ササの仲間は日当たりを好む植物とすることができます。標高900メートルをこすと針葉樹に混じってダケカンバが見られるようになります。そして次第に林はダケカンバ林へと見事に姿をかえるのです。

ダケカンバは不思議な樹です。あるときはシラカンバ林と見間違えるほどの素直な伸びと肌の白さを誇る林をつくり、あるときは荒々しく幹を曲げ、風雪にしっかりと耐えるしたたかさをみせてくれます。さらにブッシュ状に叢生することがあったり、海岸の潮風にもめげず、その適応の幅広さにただ関心してしまいます。形もさることながら、ダケカンバの春の芽吹きほど心にはやさしく問いかけてくるものはありません。ブナの芽吹きはたいへんに美しいといいますが、ともに捨てがたい良さをみせつけてくれるのです。



冬のダケカンバ林



ダケカンバ林

薄香色の樹肌に柔らかな緑のダケカンバ、空の蒼さに包まれ、これから山は春だという春告樹といえそうです。また日毎に深まる秋の黄色。木枯らしに一枚の葉も残されていない白い骨とも見える幹と枝。どの季節にも合った絵となる樹種ではないでしょうか。

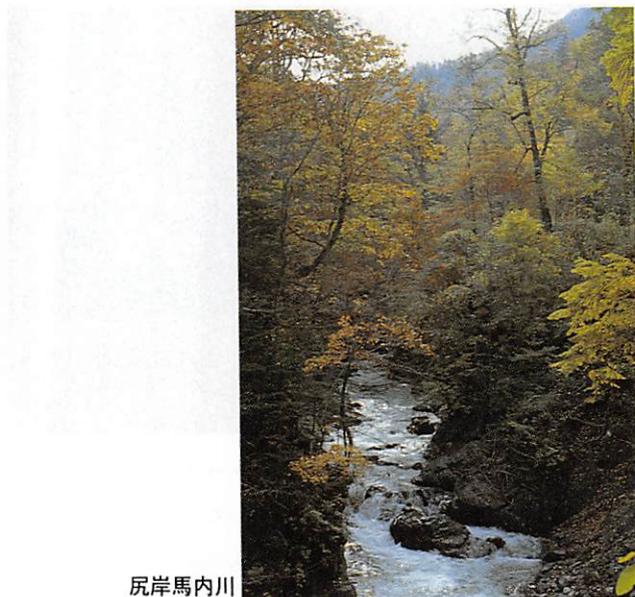
高度がさらにあがるとダケカンバ林の背丈は低くなって、ハイマツ林へと変わってゆきます。そしてそのあいだにモザイク状に展開するお花畑というわけです。

夕張岳にかぎらず、芦別岳、岨山などその高山植物帯は、これらを取り囲む幾つかの森林帯があるからしっかりと守られているのです。高山植物帯だけ保護すればいいというものではありません!! 地区あるいは山全体を一組として守ってゆかねばならないのです。夕張の山々は日本の、世界の宝なのです。



ギンリョウソウ

なお、林の側面図は自然公園総合調査（富良野芦別道立自然公園）報告書1983に使用したものです。



尻岸馬内川



ハウチワカエデ 芦別川本流で

動物たちとの出会い

有澤 浩

私は自然とのふれあいが好きでよく登山をします。特に森の小道を辿るのが気に入っています。動物たちとの思いがけない出会いがあるからです。

しりしまないがわ
尻岸馬内川にそって延びる林道を辿った時のことです。広葉樹の巨木が斜めになってよどみを覆っている場所にさしかかると、薄暗い対岸にとっても華やかな色彩の大輪が咲いているのに気がつきました。双眼鏡を当てるとそれは何とオシドリではありませんか！顔を羽に埋めて寝ている様子です。思い切って接近しました。大輪が視野いっぱいになりました。安眠を妨害されたオシドリは顔を上げました。驚いたことにそこには地味な色をしたもう一羽の鳥が寄り添う様にして佇んでいたのです。世に云う“オシドリ夫婦”を私は初めて見たのです。感激でした。



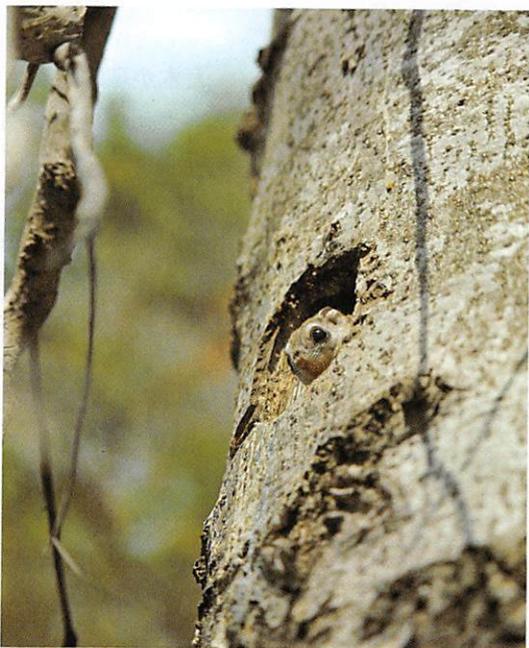
オシドリ 雄と雌



エゾタヌキ

草深い森で小休止していた時です。のそのそと私を無視して脇を通るものがあります。エゾタヌキでした。体躯のわりに足が短いせいか、がに股で腹を引きずるように歩くその姿は、久しぶりの出会いだったのですが懐かしいという感慨よりも滑稽さが先ばしてしまい、瞬間とても悪いことをしたような気がしてしかたがありませんでした。初夏に見るタヌキは意外にスマートなのですが、いま見たのは明らかに太り過ぎでした。きっと出産をまじかに控えているに違いありません。いつもの私でしたらしつこく後をつけるのですが、今はやめる事にしました。次回にはきっと可愛い子狸を見せてくれると確信したからです。

冬場にキツツキが餌をあさった大きな堀り跡のある枯れ木がありました。覗き込んだところ、中からかすかな鳴き声が聞こえてきます。コノハヅクの“巣”？ 私はまだ見たことがありません。千載一遇のチャンスです。とことん粘る覚悟を決めました。でも30分も待つ必要はありませんでした。母親が帰ってきたのです。エゾモモンガでした。大きな乳房です。きっと授乳に戻ったのでしょう。私に気づかずに巣穴しびれに入っていました。なかなか出てきません。痺れをきらしそーっと立ち上がるのと同時に彼女が顔を出したのです。双方とも金縛りに会ったように動けません。やがて彼女は巣穴に姿を消したまま森が闇に包まれても顔を見せてはくれませんでした。



エゾモモンガ



エゾライチョウ 母親と雛

大木が疎らに交ざる明るい雑木林で、エゾライチョウが卵を温めていました。毎日のように通う私に呆れてか、1 mほどの距離にまで近づいても許してくれる仲になりました。氷雨まじりの寒い毎日だったせいでしょうか、彼女は片時も巣を離れることなく熱心に抱き続けていました。珍しく晴れ上がった朝でした。7羽のヒナがめでたく誕生したのです。目が開き、羽も生えています。親鳥のまわりを元気に歩きもします。感動でした。涙が止まりません。彼女に恥ずかしくて、小高い丘に駆け登り、バンザイを連呼したのを五十路を迎えた今も忘れられません。



キビタキ

芦別岳は険しい山です。ですから私はいつも午前の2時過ぎからゆっくりと登り始めることにしています。真夏ですと3時を過ぎるあたりから空が白み始めます。トラツグミの淋しげな声につづいて、やがてヨタカの声が加わり、アカハラ、クロツグミ、ツツドリ、ジュウイチとコーラスの輪が急速に広がっていきます。中でも、ときおり鈴を振るようなソプラノを聞かせてくれるミソサザイのソロは、汗ばんだ肌を拭い去ってくれるようで、とても爽快な感じにしてくれます。しかし姿は滅多に見せてはくれません。その点美麗でかつ森の名シンガーであるキビタキは後になり先になりして、絶えず目と耳を楽しませてくれるのです。夏の森行には良き伴侶となってくれる野鳥の一つと云えるでしょう。



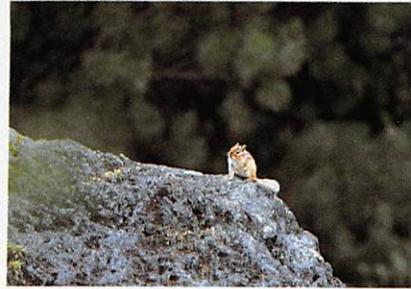
5月の芦別岳



ニホンイイズナ

哺乳動物のほとんどは夜行性です。ですから日中にはまずお目にかかれないと云っているのです。そんな動物に全くの偶然から出会った事があります。ニホンイイズナ（コエゾイタチ）とです。ご来光を拝むべく、切り株に腰を下ろし休息を楽しんでいる時でした。すぐ目の前の苔むした古い倒木の陰からひょっこり顔を覗かせたのです。茶色のボディーに白い胸当がとても似合っていました。黒いビーズ玉のような目と長い髭がおりからの朝日に輝き、それはそれはとても可愛い顔立ちでした。その愛嬌者が何が気になるのか幾度となく顔を覗かせるのです。道化役者の様でした。我にかえった時、太陽はすでに宙に浮かんでいました。

初秋のハイマツ地帯でした。岩場から下界の風景を楽しんでいるうち、岩のあちこちにハイマツの新鮮なまつかさが食い散らされているのに気がついたのです。野鳥か小動物の仕業に違いありません。別に頂上を極める必要のない私は、その正体を突き止めようと、持久作戦をとることに決めたのです。1時間近くが過ぎるころ、岩場を敏捷に走るエゾシマリスが目に見え込んできました。見れば口にハイマツのまつかさを銜くわえているではありませんか！ 残念ですがすぐ岩陰に隠れたままなかなか出て来てくれません。10数分後に姿を現した時にはもう何も銜くわえてはいませんでした。満腹したのでしょうか、化粧に余念がありませんでした。



エゾシマリス



ノゴマ

「頂上はもうすぐだ」と、いつも激励してくれる野鳥がいます。バードウォッチャー仲間に“日の丸”とあだなされるノゴマです。胸を張り、赤いのをいかにも自慢げに見せびらかして、キョロキリ、キョロキリ、キーキョロキーチリリと声量豊かに囀るのですぐわかるのです。疲れを癒そうと、お花畑に横たわり白い雲の造形の変化を楽しんでいた時でした。こともあろうに目と鼻の先ほどの距離で彼が囀ったのです。口に昆虫らしいものを挟んでいました。子育て中だったのです。近くに巣があるに違いありません。私が退散するのを待っていたように、すぐ草叢に入り餌を与えたようでした。



エゾシカ 雌とバンビ



十梨別川

となしべつがわ
十梨別川コースから夕張岳を目指した時のことです。登山口でいきなりエゾシカが出迎えてくれたのです。林道脇のまだ若い植林地でした。夏毛のエゾシカは栗色の体躯に星を散りばめたような白い斑点がありました。まさに“鹿の子”模様です。2頭の雌ジカは優しさいっぱいの表情でこちらを見つめているばかりです。やがて1頭がゆっくりと頭を上下に振り始めたのです。そしてもう1頭も。まるでお辞儀でもするかのように……。風も無いのに草がそよぎます。不思議でした。なんと、バンビがいるではありませんか！あまりにも小柄すぎて、草の中に隠されていたのです。自然の中でバンビを観察できるとは、私には夢のまた夢でした。

クィーン、クィーンと云う澄んだクマゲラの声^{こゝろ}が遠くでしています。巢立ちを観察し終えてから久しかった私は、無性に会いたくなって夢遊病者のように森をさまよいました。少しづつですが声に近づいていることは確かです。でもまだかなりの距離があります。早く行かないと移動してしまう……。あせりました。幸運でした。クマゲラがこちらに飛んで来てくれたのです。どこかに止まったようです。しきりに鳴いています。無意識のうちに駆け出していました。彼はダケカンバの枯れ木で待っててくれました。双眼鏡を当てるのですが、息が弾みなかなか捉えられません。やっと捉えたクマゲラは双眼鏡の視野の中で揺れつづけていました。



クマゲラ



ホシガラス

枯れたアカエゾマツにサルオガセが絡みつ^くく亜高山特有の風景が広がってきました。ガーッ、ガーッとしわが嘎れ声で鳴きたてるホシガラスに出会いました。濃いチョコレート色にその名のとおり星を散りばめたような白い斑点が美事でした。とてもあの嘎れ声からは想像できないほどにダンディーな装いです。4羽でした。これほど集まることは珍しいことです。ファミリーかも知れません。双眼鏡で目を凝らすのですが、どうにも区別がつきません。1羽が何やら白い物を銜えて飛び去りました。そしてもう1羽も。登山道に人間が捨てた残飯が散乱していました。北アメリカではダイヤモンド・クロウと賞賛されるホシガラスも所詮はカラスでしかないのでしょう。



ナキウサギ

夕張岳のガレ場にはエゾナキウサギが生息しています。ひょっとして遭えるかも……………下山までの30分に期待を賭けました。快晴だと云うのに、高山の風はとても冷たく感じられます。風下に陣取りました。間もなく数カ所からチーッ、チーッと云う彼らの鳴き声がおこり、1匹また1匹と、岩の隙間からぬいぐるみのような姿を現しました。丸い耳につぶらな瞳。2mほどの距離しかない私に恐れる風ありません。それどころか岩の上に腹ばいになってくつろぎ始めるではありませんか。地下は安全なのでしょうが、やはり涼し過ぎるのかも知れません。だから時おり表へ出て来ては、日光で暖められた岩の上に寝そべり、日光浴を兼ねて暖をとるのでしょう。



何を憶うかキタキツネ（芦別岳のハイマツ帯で）



カッコウの雛^{ひな}を育てるモズ（東大演習林）

虫たちの世界

西 島 浩

富良野芦別道立自然公園は北海道のほぼ中央部にあって、芦別岳(1727m)、夕張岳(1668m)および富良野西岳(1331m)などを含む地域であります。この地域全域の昆虫類の総合的な調査はまだ行なわれておりません。しかし、夕張岳を中心とした甲虫や蝶蛾類の調査記録は少なくありません。

1980年から3ヶ年かけて行われた滝里ダム環境調査では、872種の陸生昆虫が記録されております。これに夕張市や三笠市周辺の環境調査記録を加えると、この道立公園地域から記録された昆虫類は15目1,858種となってしまいます。大雪や日高山系、知床半島、ウトナイ沼周辺などから記録されている昆虫類の種類は、それぞれ3,000種以上でありますから、この地域の昆虫類の種類はたいへんに少ないこととなります。しかし、この地域の昆虫相が貧弱なのではなく、総合的な調査が不十分なためと考えられるのです。

このような現状でありますから、この自然公園全体の昆虫相の特徴を述べることはたいへんに難しいといわねばなりません。しかし、現在までの資料からいえることは、この地域の昆虫相は北海道の東部や北部と違って、温帯系の昆虫、例えばダイコクコガネやクビアカトラカミキリなどの北上が見られる一方で、寒帯系の昆虫、例えばアラメハナカミキリ、キボシマダラカミキリ、エゾヒメギフチョウなどの分布の南限となっていることなどがあげられます。これからこの地域の昆虫相の解明がさらに進めば、温帯系昆虫と寒帯系昆虫の移行の過程が、次第に解き明かされるものと思われます。

次にこの自然公園のなかで記録されている昆虫のうち、特筆すべき種をいくつかとり上げて紹介してみましよう。



ダイセツタカネフキバッタ 右(雄)、左(雌)

このバッタは最近になって、大雪山の高山帯から記録されております。その後道内各地の高山でも発見され、この公園では芦別岳と夕張岳の高山帯にも分布していることが判ってきました。雄雌とも翅が退化していて長距離の移動ができないため、地域による変異が少なくありません。北海道の特産種です。



アイヌキンオサムシ 北の峰産(雄)

北海道特産の美しいオサムシで、この虫も後翅が退化して飛べないため、地域ごとに変異があって、多くの亜種に分けられております。この地域では北の峰の標高約600m以上にはアイヌキンオサムシの基本亜種が、夕張岳の標高約1000m以上に別な亜種ユウバリキンオサムシが分布しています。この種は道央や道南では平地には生息しておりませんが、道北や道東地方では、平地の森林にも分布しております。



クロヒゲアオゴミムシ 大夕張産(雄)

これは近年大夕張周辺の河川敷から発見され、北海道の新しい記録となっております。道内のほかの地域からの記録がないので、現時点ではここだけに見られるゴミムシであります。本州、四国、九州では平地に広く分布しています。なお、夕張地方だけに見られる固有種に、ユウバリチビゴミムシというのがあります。



キボシマダラカミキリ 芦別頼城産(雌)

1936年夕張から記録された北海道の特産種です。北方系の種で、幼虫はヤナギ類の細い枝の中をボーリングして目立たない虫こぶを造り、多くのカミキリとは異なる習性をもっています。この虫こぶは芦別から三笠付近ではまれではありません。しかし、どういうわけか成虫は自然の中ではなかなか見られません。珍種として扱われています。北海道内では道北と道東でも記録があります。



芦別頼城より上へ13km、三段滝

このほか、この地域で記録されている昆虫で目ぼしい昆虫をあげてみると、蝶類ではオオムラサキ、オナガアゲハ、エゾリンゴシジミ、ジョウザンシジミ、カバイロシジミ、シロオビヒメヒカゲなどがあり、石狩低地帯以南には見られないエゾヒメギフチョウも夕張周辺には少なくありません。蛾類では夕張岳からスジアカヨトウ、シロフアオヨトウ、アルプスキウワバ、クロミツボシアツバ、アカマダラナミシヤクなど、道内でも分布記録が少ない種が発見されています。

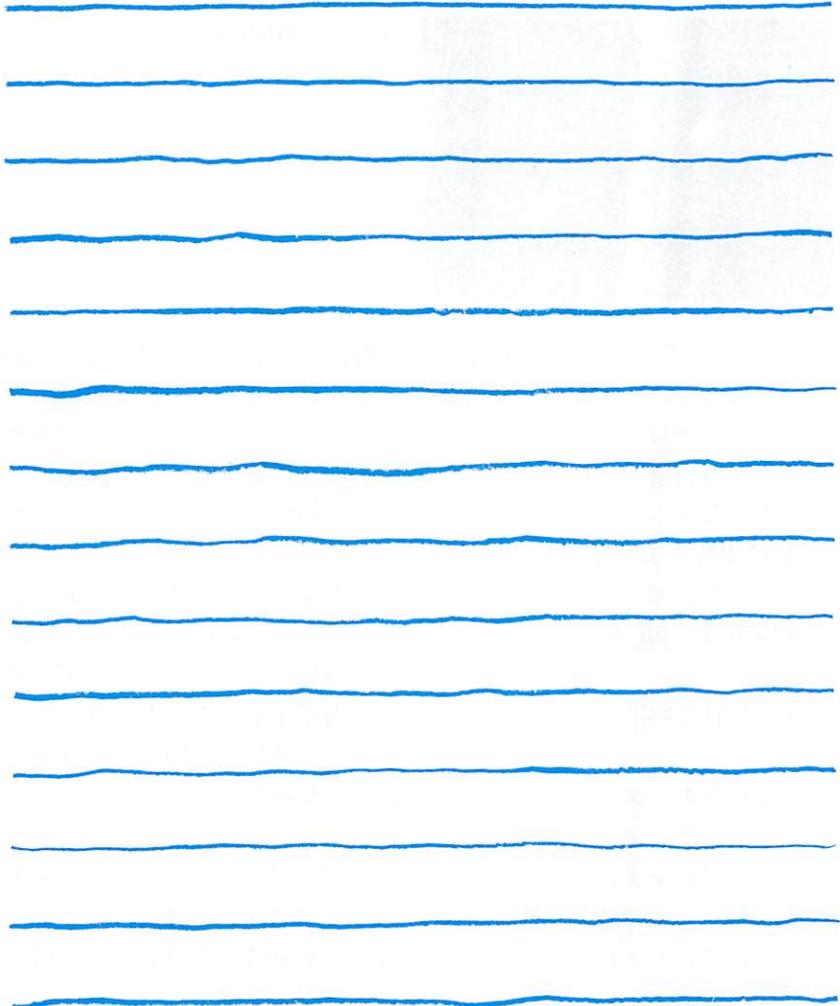
甲虫類では、ムナビロテントウダマシが北海道から始めて記録さ

れたほか、ミヤマルリハナカミキリ、オオハナカミキリ、オオトラカミキリ、トウホクトラカミキリ、クビアカトラカミキリ、エゾカミキリ、アオカミキリなどの希少種が見られています。またカラカネイトトンボやムツボシハチモドキハナアブなども記録されておりま

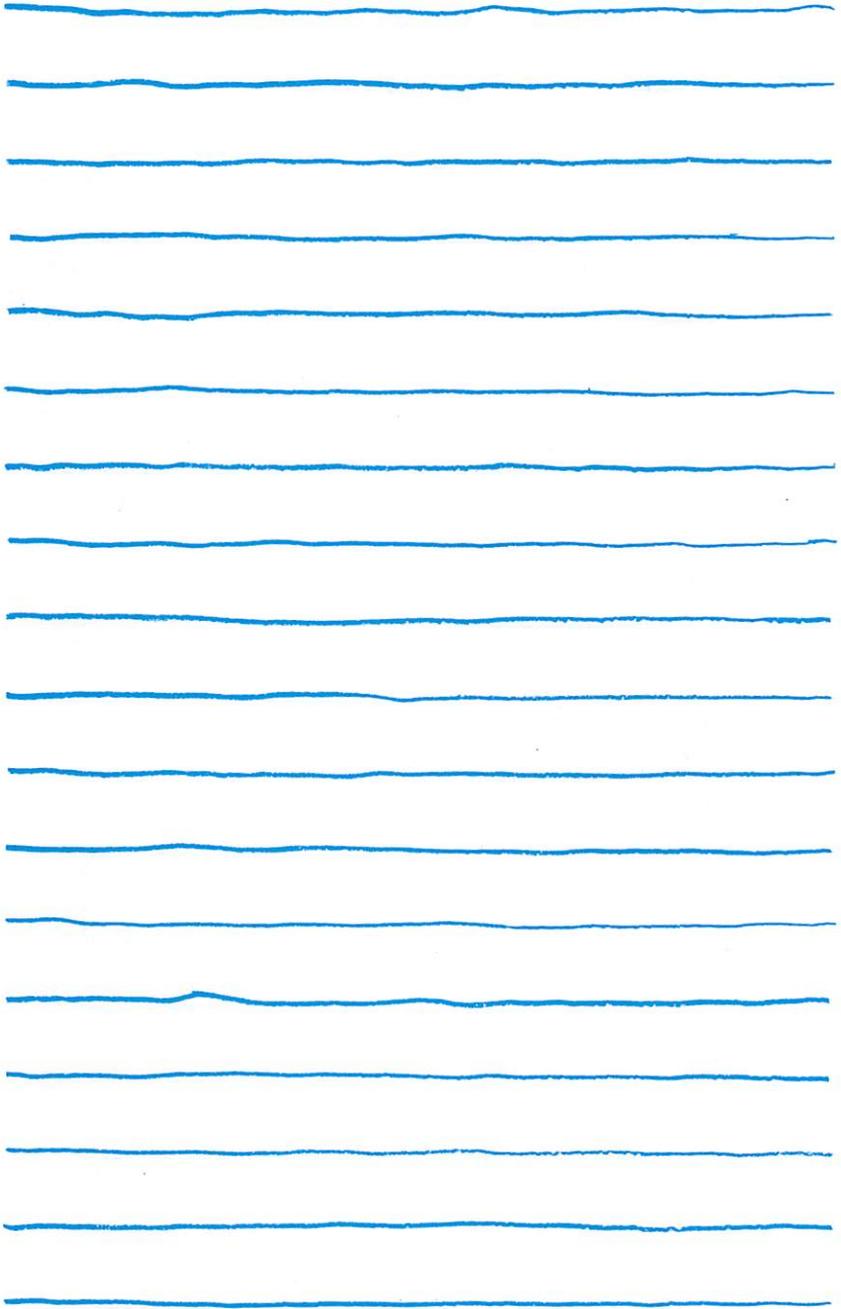
す。いくつかこの地域の昆虫相をのべてみましたが、大雪山系や日高山系のそれと比較できなかいほど、まだまだ解明がおくれています。とくに双翅目や膜翅目などの調査が進めば、まだまだ面白い昆虫が発見される地域といえましょう。今後が楽しみです。

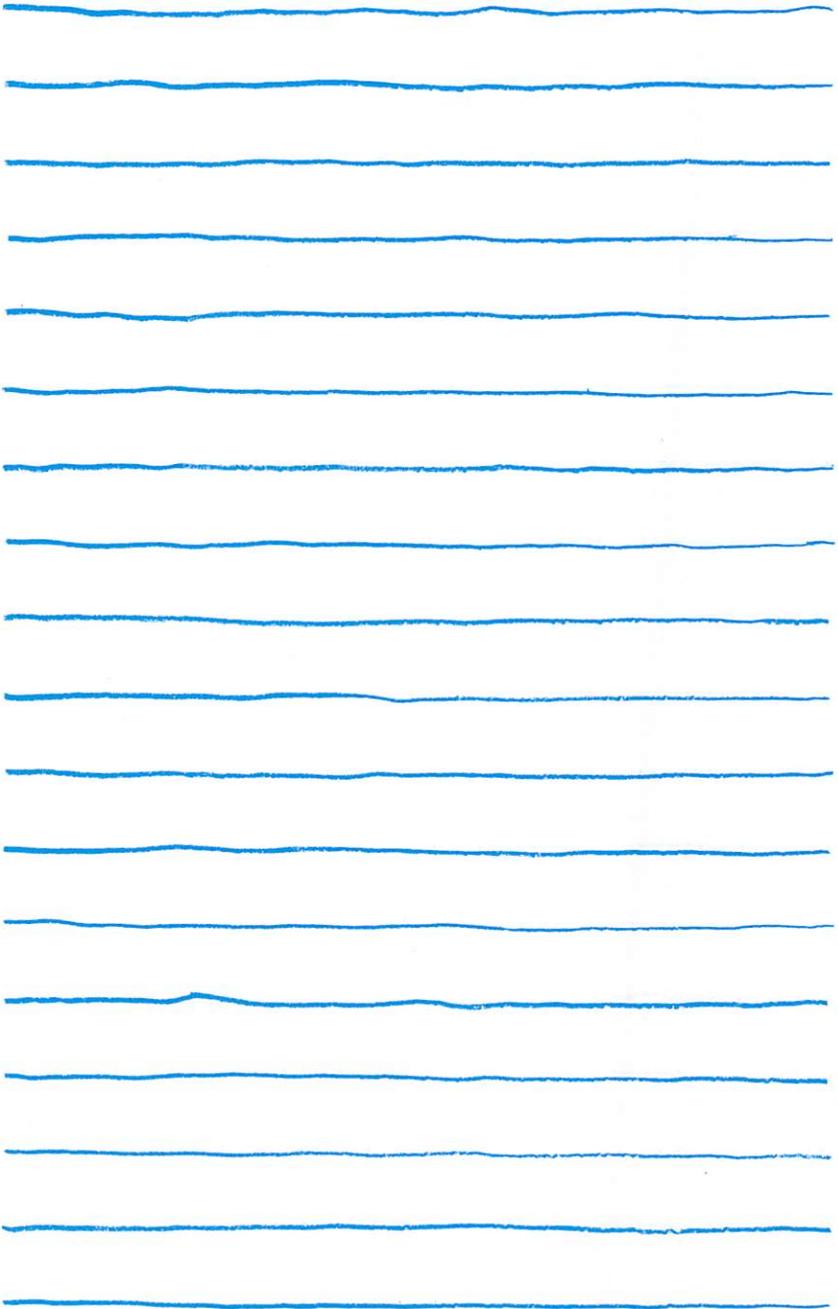


シューパロ川の蛇行（大夕張）



記憶は消える記録は残ります!
あふた小眼でたしかめた
新鮮なでまこととを……





[Redacted content]

山の自然と やさしくつき合おう

三浦 二郎

「とるのは、写真だけ」

「のこすのは、足あとだけ」

といった標語を登山道のあちこちで見かけます。写真では撮ると取るとをかけたもの。取る（採る）とは貴重な高山植物をとらないといういましめですし、のこすのはゴミや空缶を山に投げ棄てない注意です。そんなことはわかり切ったことですが。

オット、！ 美しい高山植物の花をカメラにおさめようと、足もとの別の植物をふみつけていませんか？ きびしい山の自然条件の中で生えている植物は、今きれいな花を咲かせていないつまらない草だと思っても、花を咲かせ実を結ぶ準備をしているのかも知れません。少し湿めり気のある場所だったら、あなたの足あとは、植物に致命傷を与えかねないので、登山道以外に踏みこむ時は、十分な心くばりをしましょう。



リシリリンドウ



誰も訪れない湿原
(屏風山)

グループで登るときは、リーダーの指示に従って、全員のペースに合わせて登りましょう。マイペースは全体にめいわくをかけます。

単独登山はマイペースで、カメラで撮ったり、スケッチをしたり、鳥の声や姿で野鳥の記録をとったり、小さな石ころのサンプルを拾ったりetc。しかし、夕方明るいうちに下山するようにペースを配分しましょう。

山の天気は変わりやすいので、最低ポンチョくらいは用意しましょう。雨や霧になったらその場から下山するのも勇気なんです。

終りになりましたが、この本を作るにあたり、北海道および財団法人前田一步園財団より多額の補助を、また横路北海道知事より推薦のことばをいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

また忙しい時間をさいて解説下さった諸先生に対し、深く感謝申し上げます。



雪 紋

執 筆 者

中川 充	工業技術院地質調査所北海道支所
八木 健三	北海道大学名誉教授
梅沢 俊	植物・山岳写真家
鮫島惇一郎	自然環境研究室
有沢 浩	東京大学北海道演習林
西島 浩	北海道昆虫自然史研究所
三浦 二郎	樽前自然教育研究所

イ ラ ス ト

村野 道子・八木 健三

写 真

中川 充・梅沢 俊・鮫島惇一郎
有沢 浩・西島 浩

編 集 委 員

三浦 二郎・鮫島惇一郎

編 集 事 務 局

高橋 武雄 (社) 北海道自然保護協会事務局

夕張・芦別の自然

1993年2月発行

編集・発行 社団法人 北海道自然保護協会

〒060 札幌市中央区北3条西11丁目

加森ビル5

電話 (011) 251-5465

印 刷 株式会社 広報社印刷

〒060 札幌市中央区南1条西12丁目

電話 (011) 251-5887

北海道自然保護協会